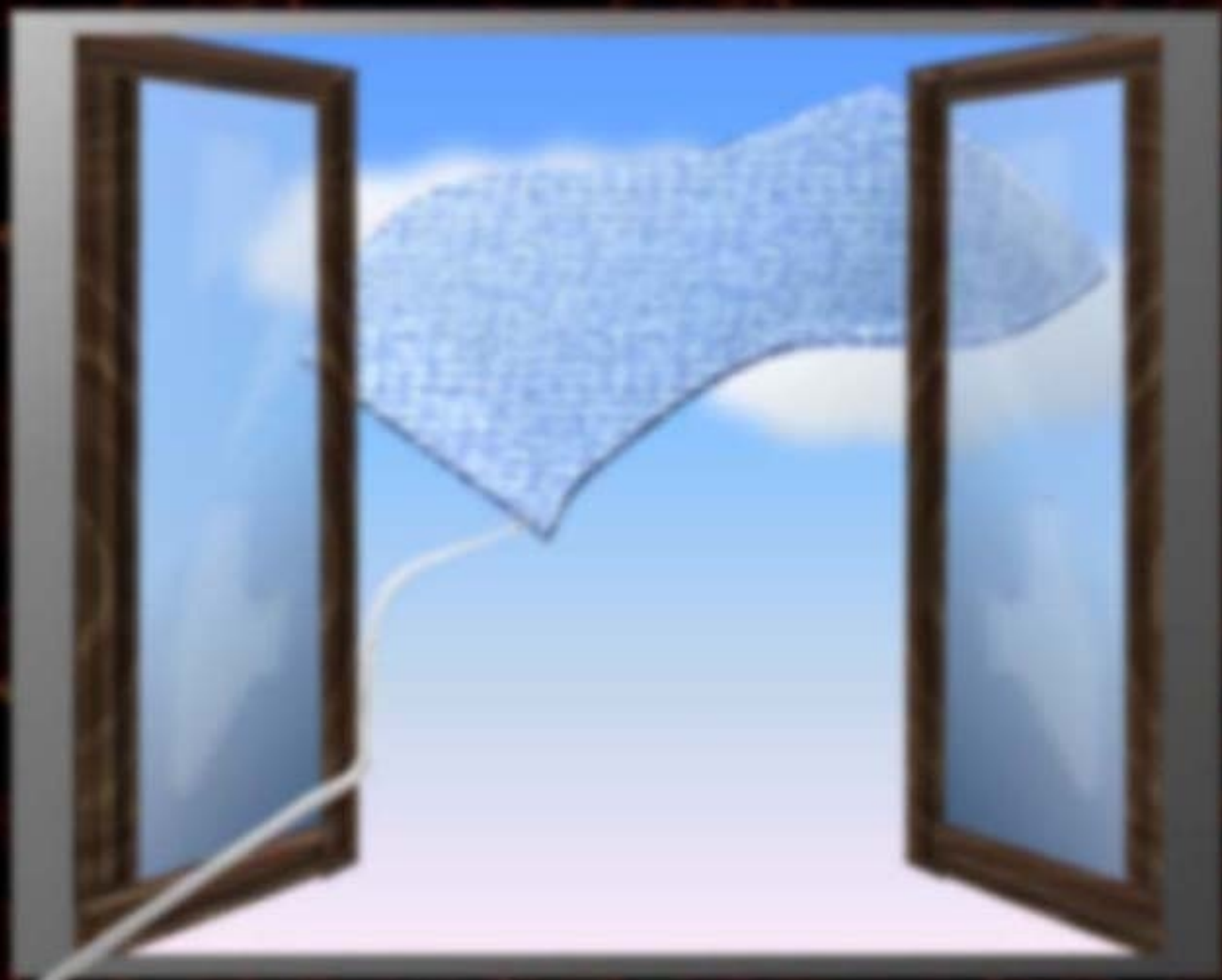


週刊

夢の窓

No.3



むうにい

カボチャ・レース

町内で、カボチャレースが開催されるという。

わたしは飛び入りで参加した。

会場はすでに人が大勢集まっていて、わいわいと盛り上がっていた。

ピギャーッという拡声器のハウリングに混じって、町長のがなり声がこだまする。

「さあさあ、町内の皆様！ これより、第2756回・カボチャレースを行います。参加者はエントリー・ナンバーの書かれたたすきを受け取って、待機してくださいっ！」

わたしは受け付けに並び、たすきをもらう。ついでに、レースの内容を係員に尋ねた。

「カボチャレース、これが初めてなんですけど、どんなことをするんですか？」

古館一郎にそっくりな係員は、メガネの真ん中を指で押し上げる。

「みなさん、勘違いなさっているかと思うんですが、カボチャレースは、決してカボチャの馬車で競争をするとかじゃないんです。その点はまず、はっきりさせておかなくってはなりません。参加者には、三輪車があてがわれます。ええ、普通の三輪車。つまり、幼児が乗って遊ぶ、あの三輪車です。それに乗ってですね、町外れのカボチャ畑まで走ってもらいます。そう、ここからすでに競争になっているわけですね。それから畑のカボチャを拾って、三輪車の荷台に載せ、スタート地点まで戻ってきていただきたい、とまあ、こんなルールです」

まるで機関銃のように、これだけのことを一気にまくしたて、「わかりました？」と言いたげに、じっとこちらを見つめるのだった。

「あ、はい。単純なルールなんですね。わかりました、ありがとうございます」

わたしは礼を言い、待機場所の簡易テントへ向かった。

レースはすぐに始まった。三輪車が次々と飛び出していく。

それにしても、大の大人が真剣な顔で三輪車を漕いで走るのを見るのは、滑稽であり、情けないような、力の抜けた笑いが込み上げてくる。

けれど、笑ってばかりもいられない。順番が来たら、わたしもあんな姿をさらけ出すことになるのだから。

いよいよ自分の順が回ってきた。（できるだけ）さっそうと三輪車にまたがると、合図を待つ。

わたしは、この瞬間が苦手だ。緊張して鼓動が倍くらい速く打つ。

パンッとピストルが鳴った。

総勢30名が三輪車のペダルをガチャガチャと音を立て、一斉に道路を走り出す。

ちょっとばかり出遅れたかもしれない。半数がすでに先を行っている。

負けず嫌いのわたしは、力を振り絞って追い上げた。1人抜き2人抜き、そして先頭に躍り出る。

町を出ると、広大なカボチャ畑が広がっていた。そこかしこに緑色をした、大きなカボチャが転がっている。

三輪車を飛び下り、畑の中をずぶずぶと走っていく。手近なところに落ちていたカボチャを抱えて、三輪車へ取って返す。

(優勝はいただきかなっ) わたしは心の中でほくそ笑んだ。

ところが、ここで問題が発生した。

カボチャが大きすぎて、三輪車の荷台に載らないのだ。もたもたしているところへ、後続の三輪車が続々とやって来る。

「まずい、なんとかしなくちゃ……」

とっさに思いついたのが、カボチャの中身をくり抜いて頭にかぶる、というアイデアだった。

目鼻にもちゃんと穴を穿って前が見えるように工夫をし、わたしはカボチャをすっぽりとかぶった。

これでよし！ さあ、出発だ。

カボチャをかぶり、三輪車でギコギコ町中を走っていると、沿道からの声援に混ざり、こんな声も聞こえてきた。

「やだ、あの人、カボチャかぶってる。カボチャ頭だわ。そうよ、カボチャ頭のジャックよ」

なるほどその通りだ。脳みその代わりに、カボチャの種が詰まっている気がした。

別世界をのぞく

ハロウィンの夜、外で呼ぶ声がして目が醒めた。

2階の窓から見下ろすと、庭にクレヨンしんちゃん達が立っている。

「おーい、近所の別世界に散歩に行かない〜？」

「別世界ってどこさ」わたしが聞き返すと、しんちゃんは大げさに肩をすくめてみせた。

「やれやれ、どこだかわからないから、別世界なんだゾ」

なるほど、それもそうだ。わたしは納得した。

「行くよ。降りていくから待ってて」

庭に出てみると、ポーちゃんが木の枝で地面に何か描いているところだった。

風間くんが代わりに説明してくれた。

「ポーちゃんはね、別世界へと通じる道を描いているんです。ほら、1本の道がどんどん分かれていくでしょう？ 無限に存在するんですが、今日は5本だけ……」

ポーちゃんが描き終わると、わたしたちはその「道」の前に並んだ。

「どの道をいく？」しんちゃんがわたしを見上げる。

わたしにはどれも、同じ線にしか見えないので、適当に「じゃあ、これっ」と、右端を選んだ。

しんちゃんは先頭に立ち、

「みんな、オラに続くんだっ」と号令を掛け、スタスタと歩き始めた。線の途切れた所に足を踏み入れたとたん、しんちゃんの姿がスッと消えた。まるで、その先に見えない道でもあるかのよう。

「ボクたちも行こうっ」風間くんが後に続き、ポーちゃん、ネネちゃんも時空に吸い込まれていった。

「ボク、行きたくないよ……」マサオくんがぐずるので、わたしはなだめながら手を引かなくてはならなかった。

「ほら、大丈夫だから。みんな入っていったんだから、一緒に行こうよ。ねっ？」

わたしとマサオくんは、線から足を踏み外さないよう、慎重に進んでいった。

突然、目の前が明るくなった。まぶしさのあまり、思わずまぶたをギュッと閉じてしまう。

ゆっくりと目を開くと、そこは今しがたまでいた夜の庭ではなく、日のさんさんと降り注ぐ、どことも知れない野原だった。

「おーい、もたもたしてると置いてっちゃうゾー」ずっと向こうの丘から、先に行ったみんなが手を振っていた。

わたしたちの世界ではハロウィンの季節だったが、ここは春なのだ。タンポポやキンポウゲが黄色い花を一斉に咲かせている。

「これがほんとうの、野原しんのすけ、だねっ」さっきまで泣きべそをかいていたマサオくんが、そんなことを言っている。

「マサオくん……」

野原の間を縫うようにして、細い道がどこまでも延びている。わたし達の立っている場所からあの丘へ、そしてさらにずっと向こうまで。

わたしとマサオくんは道を歩き出した。

「遅かったわね」丘までやって来たとき、真っ先に聞かされたのが、ネネちゃんの文句だった。

「ごめんね、ネネちゃん。だって、マサオくんが行きたくないって、ダダをこねるもんだから」

「マサオくんはケツの穴がないな～」としんちゃん。

「へっ？」マサオくんは、慌てて自分のお尻に手を当てる。

「……それを言うなら、ケツの穴が小さい、だろ」風間くんが訂正する。すぐに真っ赤になって、「下品だぞ、しんちゃん」

みんなの話では、道を前に進む限りは、この世界をどこまでも、どこまでも行けるらしい。そして、果てが無いようだ。

「うっかり、道からはみ出ちゃったらどうなるの？」わたしは聞いた。

「決まっていますよ」風間くんが言う。「亜空間って所に迷いこんじゃうんです。上も下も、それに時間さえもない場所ですよ。だから、ボクたちは気をつけて歩かなくちゃ」

それを聞いて、怖がりのマサオくんがおびえた声を出した。

「えーっ、そんなの聞いてないよお。ボク、帰りたいつ」

「マサオくんはワガママだな～」しんちゃんが肩をすくめている。

正直なところ、わたしも（これは慎重にならざるを得ないぞ）と思った。そこで、マサオくんの意見を尊重するふりをして、

「ほら、マサオくんがこんなに怖がってるし、そろそろ引き返そうよ」と提案した。

みんなも、しぶしぶとうなずくのだった。

帰り道も、しんちゃんが先頭を務めた。ポーちゃん、風間くん、ネネちゃん、マサオくんがそれに続き、しんがりはわたしだ。

あとちょっとで元の世界へ帰れる、というところで、わたしはうっかりくしゃみをしてしまった。

驚いたマサオくんがパニックを起こし駆け出して、その先にいるみんなを次々と突き飛ばしてしまう。

「きゃっ、ちょっとあんた、こんなところでっ！」ネネちゃんは道の外の茂みにつんのめってしまった。とっさに前の風間くんのシャツをつかんだものだから、一緒に野原へ倒れ込んだ。

「うわーっ！」

2人は亜空間へと落ちていった。

マサオくんの暴走は止まらず、ポーちゃんもしんちゃんも弾き飛ばし、最後に自分も足を滑らせてしまう。

わたしはただ独り取り残され、呆然と立ちつくすのだった。

とぼとぼと家に戻り、何気なくテレビをつける。

ちょうど「クレヨンしんちゃん」が始まったところだった。さっきまで遊んでいたみんなが、液晶画面の中で手を振っていた。

亜空間にはまるとは、つまりそういうことだったのか。

彼らはこれから先も、ずっとテレビの中で生き続ける……。

仮面ライダー免許

筆記試験、実技試験ともに合格し、はれて仮面ライダーの免許を取得した。

免許証には「仮面ライダー1種・但し改造二輪に限る」と記されている。つまり、特殊チューンアップされた二輪にしか乗れないのだ。

免許センターで交付してもらおうとき、係官に尋ねてみた。

「この免許でも原付は乗れますよね？」

係官はコホン、と咳払いをしたのち、もったいをつけてこう言った。

「まことに申し訳ございませんが、原動機付自転車免許を新たに取得していただく必要があります」

「え、そうなんですか……」残念ながら、わたしは原付の免許を持っていないのだ。

あまりにも落ち込んでいるわたしを見かねたのか、係官は幾分声を和らげて付け足した。

「しかしながら、その免許は排気量に制限がありません。たとえ、ロケットエンジンを積んでいようとも」

気を取り直したわたしは、その足でバイク・ショップへと向かう。

ショーウインドウに、前から目を付けていたY2Kというバイクがあった。今の免許だと、そのままでは乗れないが、ガス・タービン・エンジンを、別のものに載せ替えば、「改造二輪」として認定されるはずだ。

「ごめんくださーい。ショーウインドウにあるY2Kが欲しいんですけど。あと、ついでにエンジンの載せ替えをお願いします」

奥で別のマシンを調整中だった店長がやって来て、

「こいつのエンジンを？ いったい、なんでまた……」

わたしはさっきもらったばかりの免許証を見せた。

「これでも一応、仮面ライダーなもんで、ノーマルだと乗れないんです。で、どんなエンジンがいいんですか？ 世間受けするような、何かすごいのがいいんですけど」

店長はしばらく考え込んでいたが、はっと思いついたらしく、倉庫へと駆けていった。

息せき切って抱えてきたのは、デスク・トップ・パソコンほどの黒い箱だった。

「これなんてどうだろうね。イオン・エンジンだよ。普通のエンジンでいうところの4気筒なんだけどさ、3気筒までぶっ壊れても、ちゃんと家まで帰ってこられるんだぜ」

「へー、そりゃいいですね。方向音痴だし、重宝しますよ」わたしのY2Kには、このイオン・エンジンを積んでもらうことにした。

「もうY2Kとは呼べないから、他の名前をつけなきゃね」店長が言う。

「何がいいですか？」とわたし。

「はやぶさ、なんてどうっすか。なんか、かっこいいじゃないの」

「ああ、いいですね。そうします」

わたしの「はやぶさ」は、来週の仕上がりを予定して、整備場へと運ばれていった。

次にわたしが向かった先は、農協の管理する山中の荒地だった。ここでバッタを捕まえないと行かない。

ご存じの通り、仮面ライダーはバッタがモチーフである。近頃ではバッタに飽き足らず、カブトムシだったりクワガタだったりする。さらには、昆虫ですらないものが増えつつある。

そうした中、わたしはあえて、原点回帰を目指そうと思ったのだ。

辺りにはオンブバッタやイナゴ、コオロギ、と季節に関係なく、色々な虫が跳ね回っている。さっと手を伸ばしては捕まえてみるのだが、じっくりと眺めてみると、どれもインパクトに欠ける。

「どの虫にしようかな。1度決めたら、それが生涯、変身したときの姿だから、どうしても慎重になっちゃうな」

日も傾いた頃、草むらでリーン、リンという涼しげな鳴き声がある。音を頼りに藪へ腕を突っ込んで、握った手をそっと開いてみると、スズムシが1匹、じっとわたしを見つめていた。

「けっこう可愛い顔をしてるな。よし、この子に決めたっ」

わたしはスズムシをベルトのバックルに押し込めると、夕日に向かって、ポーズをとった。

「ヘンシンッ！」

今日からわたしは、「仮面ライダーリンリーン」だ！

スクラップ置き場の釣り堀

スクラップ置き場のわずかばかり空いたスペースに、小さな池がある。わたしはその前に座って、のんびりと釣り糸を垂らしていた。

水は錆色に濁っていて、底がまるで見えない。日の光がみなもで揺れて、時折キラッと光るものがある。それらは水草なのだが、どれも金属でできていた。

池は相当に深いらしく、釣り竿を沈めて水の中を探ってみても、いっかな手応えがない。「底が抜けてるんじゃないだろうな。だとしたら、魚なんているわけがない。釣り堀屋に、一杯食わされたのかなぁ……」

時折、糸をたぐって釣り針を確かめるのだが、エサを囓られている様子すらない。

ふと、思い付いた。エサにアカムシを使っていたけれど、ここの魚はこんなものでは喰いつかないのかもしれない。

試しに、そこいらに転がっていた硬貨大の歯車をエサ代わりにぶら下げしてみた。

池の真ん中辺りを狙って、竿を振る。歯車付きの釣り針が、ポチャンと音を立てて沈んでいった。波紋が岸に届く間もなく、たちまちアタリが来る。「わっ、反応はやっ！」わたしは立ち上がり踏んばった。かなりの引きだ。これは大物に違いない。

リールを巻いていく。相手は釣られるものか、とグイグイと引っばる。水面に影が見え、水しぶきが勢いよくはねた。ついに釣り上げた。50センチはありそうな、大きなコイだ。

けれど、よく見ると何かおかしい。黒いウロコは、光の加減で虹色に反射するし、尾びれにはスクリューがついていて、今も高速で回転している。「クローム・メッキされた、機械の魚じゃんっ！」わたしは仰天した。あんまり驚いたものだから、タモを差し出してすくうのを忘れてしまった。

金属製の魚は、エサに使った歯車のかげらをぺっと吐き出すと、ザブンと池の中へ帰って行ってしまった。

「あ、しまった……」

1匹釣ると100円貰えることになっていた。但し、1時間の場所代が500円も取られる。まだ釣果は0だ。しかも、この調子では時間内に5匹以上など、とても無理だ。「まったく、割に合わないな。それに、あんな魚を釣ったところで、いったいなんになるんだろう。鯉こくにするにしたって、よほど歯が丈夫じゃなけりゃ、食べるのも大変だ」

独りごちながら、わたしはまた座り直した。

別の歯車を探して結びつけると、わたしは再び釣り竿をしならせる。

まあ、いいさ。何も鯉こくばかりが料理じゃない。うすーく刺身にでもすれば、食べられなくもないだろう。

池の水は、さっきにも増して赤く淀んできた。

もやし少年が様変わりする

町中で、中学の時の同級生とばったり会う。卒業以来だ。

とはいえ、初めは誰だかわからなかった。

「よっ、久しぶり」先に声を掛けてきたのは同級生の方だった。

「はい？」ちょっとびっくりして、相手をじっと眺める。

「おれだよ、おれっ」彼は自分の顔をしきりに指さす。

とっさに、今はやりの「オレオレ詐欺」かと警戒してしまう。

「あの、どなたでしたっけ？」わたしは用心深く尋ねる。

「なんだよ……本当にわからないのか」困ったような顔で肩をすくめる。そのしぐさを見て、あっと思出した。クラスにいた、あのひょろっとした大人しい人物。体が弱くて、体育はいつも見学していたし、学校も休みがちだった。そいつはいつも、泣き笑いのような顔で肩をすくめるのが癖だった。

「なんだ、永沢君かっ。早く言いなよ！」

ずっと会わなかったからといって、顔を忘れていたわけではない。当時とはすっかり様変わりしていたのである。

かつての永沢君は、食事ももらっていないんじゃないかというくらい、ガリガリだった。日陰で育ったもやしそっくりなので、あだ名もそのまま「もやし」。

それがどうだろう。今、わたしの目の前にいる彼は、筋骨隆々、身長も倍くらいある。

ん？ 待てよ。さっきまでわたしとあまり違わなかったはず。いつの間にそんなに伸びたんだ？

「どうした？ ああ、おれの背のことか」友人はわたしを見下ろしながら笑った。「おれ、ときどき成長期だからさ。急に背が伸びちゃうことがあるんだ。変だろ、笑っていいぜ」

「ふうん、そうだったんだ。てっきり、目の錯覚かと思っちゃった」

「うん、よく言われる」

彼は今、道路公団で働いているという。トンネル工事を1人で任されているそうだ。

わたしは驚いた。

「すごいな。大変なんだろうね、その仕事」

すでに5メートルは超えているため、はるか頭上から声が降ってくる。

「いやあ、それほどじゃないさ。おれにはそれしか特技がないから」

とんでもない。そんな必殺技なら、1つあれば十分すぎる。

現場がすぐ近くだというので、一緒に行くことにした。

大きな岩山で、貫通すれば日本一長いトンネルになるという。

彼はバリバリッと上着を引きちぎった。そのたくましい筋肉だけで。自分の頭ほどもある力こぶがポコンと盛り上がる。まるで、超人ハルクだ。

「じゃあ掘るから、ちょっと離れててなっ」そう言うなり、粘土でもえぐるように、岩をざくざくと掘り始めた。

あのもやしは、よくここまで育ったものだ。わたしは感心して、ただ見守るのだった。

「そのうち、ペンタゴンあたりからオファーが来るかもしれないね」わたしが言うと、つと手を止めて頭を搔いた。

「そうかなあ。悪くは……悪くもないな、それ……」

トンネルは、あと1月ほどで貫通するそうだ。

スナフキン、旅の途中

お台場のアクアシティの前の磯で、スナフキンがのんびりと釣りをしていた。「あれ、こっちの方まで来てるんだ」わたしはスナフキンの横に腰をおろす。スナフキンはちらっとわたしを見て、「やあ」と手短かに答える。そうか、ムーミン谷にはまだ春が来ていないんだな。それで、こうして世界各国を旅しているのか。

「釣れる？」わたしは聞いてみた。

「いや……。さっきから、もう3時間も座ってるんだけど、さっぱりさ」

それでいて、別に退屈をしている様子もない。釣れるかどうかなど、どうでもよさそうだ。ただ、こうしてみなもを眺め、ぼんやりと考え事をすることが楽しいらしい。

「今夜はどこにテントを張るつもりなの？」

「そうだなあ。池袋のサンシャイン・シティの公園でも行こうか。それとも、駅の近くのカプセル・ホテルに泊まるのもいいかもな」

カプセル・ホテルか。なんだか、スナフキンらしくないな、と内心で思う。でも、近頃は都内も物騒だし、第一、彼の嫌いな夜警も増えてきている。

一緒になって浮きを見つめているうち、だんだんと日が傾いてきた。スナフキンの牧歌的な雰囲気に取り込まれ、すっかり時間を忘れてしまっていた。

彼はいつ頃ムーミン谷へと戻るのだろう。北欧の春は遅い。まだ、しばらくは旅を続けることになるはずだ。

そんな心中を察したのか、スナフキンはまるで独り言のように語り始める。

「ぼくはね、昔話を探し集めて世界中を回っているのさ。それは素晴らしいものだぜ。もう、これまでに千は集まった。でも、まだそのさらに千倍はあると思っているよ。最後の1つまで探すつもりなんだ」

わたしはそれを聞いて、とてもうらやましくなった。まだ行ったことも見たこともない土地を、もしもスナフキンと一緒に旅することができたら、どんなにか心躍ることだろう。

スナフキンの横顔は、夕日を受けて赤く染まっている。磯風が、深緑の帽子のつばを揺らす。

一緒に行きたい、とわたしが言ったら、スナフキンは「ああ、いいとも」と微笑んでくれるだろうか。それとも、「ぼくに道連れは必要ないな。それに、ほら。君にだって、自分だけの道というものがあるだろう？」と答えるのだろうか。

帽子からはみ出した栗色の髪は、意外と巻き毛だった。風が吹くたび、ふわっと目の端にかかる。

その目は穏やかで、けれども断固とした意志を宿していた。

雲間を走る月を眺める

体育館をそのまま100倍に引き伸ばしたような広い部屋のと真ん中に、1組だけ布団を敷いて、わたしは仰向けに寝そべっている。

天井はなく、夜の空がそのまま見渡せた。満月は明るく、部屋の中を隅々まで照らし出す。

時折、黒い雲が疾風のように走る。雲はつかの間、月を覆い隠し、そのたびに部屋は闇に包まれるのだった。

「まるで、世界の再生と破壊のようね」そう、傍らでつぶやく声がする。顔を向けると、いつからいたのか、月それよりも白い顔をした少女が横たわっていた。

「君、誰だっけ？ どこかで会った気がするんだけど……思い出せないや」とわたし。

彼女は声も立てずに笑うと、

「忘れられちゃったんだ、わたし」と言った。

わたしはなんだか申し訳ない気持ちになって、もう1度真剣に記憶をたぐってみた。

白いユリの花が、まぶたの奥にちらっと浮かんで消えた。そして、かすかに香りだけが残る。

その香りは、少女の体から発せられているらしかった。ふつう、匂いというものはかぎ続けているとだんだんとわからなくなってくるものだが、いつまでも鼻の奥をくすぐっている。

漠然とした心の中の残像が、次第にはっきりと形を結んでいく。

あれはいつのことだったろう。わたしはとある山に迷い込んだ。雲間から差す月明かりは、梢を透かしてまだら模様を作り、現世とはどこかかけ離れた、妖しい様相を呈していた。

光の筋が地に突き刺さる場所に、白いユリが一輪、月の雫のように花ほころんでいる。風がそよ吹くたびに、音もなく身を揺らす。まるで笑っているかのように。

「君って、あのときのユリなの？」わたしは聞いた。

「あら、やっと思い出してくれた？ もちろん、そう。わたしはかつてユリだった」

「あれからずいぶんと経ったね。10年くらいかなあ？」わたしがそう言うと、少女は首を振った。

「それじゃあ、きかないわ」

「20年？」

「ぜんぜんっ」

「君は覚えてるの？ あれが何年前だったか」わたしは降参した。

「覚えてる。でも、過ぎた年を数えても無意味だわ。だって、この宇宙が18回生まれ変わった大昔のことだもの」

「そうか、もうそんなになるんだ……」

空では今、まさに月が雲に飲み込まれていくところだった。広大な部屋は、見る見る暗くなっていく。

わたしたちは黙り込んだ。しんと静まり返った中、聞こえるものといえば、お互いの呼吸の音ばかり。

りだった。

漆黒に包まれる刹那、ふいに思った。

あと何回、この宇宙の再生と破壊に立ち会うのだろうか、と。

週刊 夢の窓 No.3

<http://p.booklog.jp/book/85539>

著者 : mueny

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/mueny/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85539>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85539>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ